

編 集 後 記

今年度の学生懸賞論文は、60編の応募があり、学部ごとには、経済・22編、経営・2編、社会・18編、文・14編、法・4編でした。なお、昨年度は62編でしたので、ほぼ同じ応募数といえましょう。

私たち学生論集刊行委員会による予備審査で、30編が予備審査を通過したのち、本学教員による本審査にかけられ、最終的に優秀作1編、佳作7編、準佳作1編が入選となりました。

今回の応募作の特徴を概観すると以下の通りとなります。

まず、1・2回生からの応募が8件ありました。昨年度は62点の応募のうち、4回生からの応募が53点、3回生からの応募が9点で、1・2回生からの応募はゼロでしたので、1・2回生の積極的な応募が目立ち頼もしく感じました。さらに、今年度応募のあった8件のうち、7件が予備審査を通過し、3回生5名と4回生1名による共同執筆が佳作として入選しました。意欲的であるとともに質の高さも感じられました。

次に、時流に乗った課題論文が目立ちました。論文テーマは種々ですが、その年に話題になっています時事問題、経済問題等を反映しています。今年度は、中国に関するテーマ、株式に関するテーマ、起業に関するテーマでの論文がありました。このことは時代の変化に対する学生の敏感な反応だろうと思われます。

第三に、学部別応募点数の特徴について、2～3年前までは経営学部からの応募が多くありましたが、昨年度6点、今年度2点と少なくなり、逆に法学部からの応募が昨年度は1点だったのが、今年度は4点と着実に増えています。たぶん、ゼミ担当者の影響があるかと思いますが、経済、社会、文学部からの応募から見ると、経営学部からの応募が少ないのはややさびしい気がします。ただし、優秀作は経営学部でした。

第四に、審査員の評価が分かれた論文が目立ちました。これをどう解釈してよいか、迷うところですが、論争的な内容・主張の論文が多かったといえるのかもしれませんが。

以上が今年度の講評です。また、このような学生懸賞論文制度は、本学の良き伝統として定着したといえますが、この制度を一層発展させていくのは他ならぬ学生の皆さんです。応募してくださったすべての学生の方々に感謝

するとともに、来年度以降の応募を期待しています。

最後に、本論集刊行に至るまで、各所各位から多大なご尽力、ご協力を頂きました。応募学生の論文指導や本審査の依頼をご快諾くださいました諸先生方をはじめ、学部事務室、教務課、総合研究所など各所の事務担当の職員の皆様方、関係各位に厚く御礼申し上げます。

2006年3月

学生論集刊行委員会

松尾 順介（経営学部）

前田 治郎（経済学部）

石田 易司（社会学部）

米山 喜晟（文学部）

松村 昌廣（法学部）